

第4回

書道監修・執筆 青山浩之

書の表情いろいろ ～書風を比べてみよう～

今回学ぶこと

前回に続いて中国の古典に学び、臨書に挑戦する。今回は楷書の中でも対照的な表情を持つ「雁塔聖教序」と「自書告身」を取り上げる。軽快な書と重厚な書の違いを、リズム感や筆使いの面から理解して臨書する。また、「筆」の材質や毛の種類について詳しく知る。

学習前チェック！用語の意味を確認しておこう

唐の四大家／書の古典／臨書^{りんしょ}／用筆法^{ようひつほう}／起筆^{きひつ}／送筆^{そうひつ}／収筆^{しゅうひつ}／穂先^{ほさき}

褚遂良と顔真卿

褚遂良^{ちよすいりょう}（596～658）と顔真卿^{がん}（709～785）は、前回の欧陽詢・虞世南とともに「唐の四大家」と呼ばれる。褚遂良は学問や人格に秀でた人物として、皇帝からの信頼も厚かった。代表作は58歳のときの「雁塔聖教序」。西安のシンボルとなっている大慈恩寺の大雁塔に収められている。

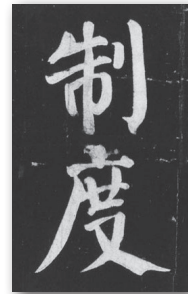
顔真卿は褚遂良より1世紀以上あとの、唐の中期に活躍した。職務に忠実な役人だったが、その性格が権力者に疎まれ、何度も左遷された。しかし国への忠誠心が強く、反乱が起きたときには自ら兵を挙げ、晩年には反乱軍に幽閉され処刑されるという壮絶な人生を送った。72歳のときの「自書告身」は、辞令書を自書したもので、そうした生き方を象徴するかのよう力強い。

二人とも、はじめは当時の一般的な書を学び、年齢を重ねながら時間をかけて、それぞれの書風を確立していった。

今回のお手本



雁塔聖教序
（唐時代 653年）
褚遂良
（596～658年）



自書告身
（唐時代 780年）
顔真卿
（709～785年）

（拡大版は12、13ページ参照）

軽快な書と重厚な書

筆使いや書き方の違いで、書にもいろいろな表情の違いが表れる。

「雁塔聖教序」は軽快な書の魅力を味わえる古典。線に張りがあり、太い部分と細い部分の差が大きい。真似することを意識しすぎるよりも、体全体を使って、躍動感やリズム感を意識して書くようにしよう。特に「**葳鋒**」の筆法を効果的に使い、筆の弾力を生かして書くことが大切だ。

一方、「自書告身」は重厚な書の雰囲気が伝わる古典。太く力強い線、はね・払いなどの独特な用筆が特徴だ。これらは、太い線を書いたあと、穂先を整えやすくするための筆法で、特に「顔法」と名付けられている。臨書を通して、こうした用筆の工夫やいろいろな書風の違いを学ぼう。

筆の材質 毛の種類

筆の穂の多くは動物の毛でできている。柔らかく、もっともよく使われるのが羊毛。中国の山羊の毛を指す。一方、硬い筆に使われるのは馬の毛。そのほかにも、鹿、タヌキ、ムササビなど、さまざまな動物の毛が使われている。また、同じ動物の毛でも、体の部位によって硬さが違う。たとえば馬は、尾、胴、たてがみで、硬さや長さが違う。

中には、クジャク、七面鳥、白鳥の羽や、竹の筆などもあり、一口に筆といってもさまざまな材質のものがあることがわかる。

達人からひと言！

筆使いや書き方の違いで、書にもいろいろな表情の違いが表れる。まずはあまり難しく考えずに、それぞれの書の美しさや魅力を味わいながら臨書を楽しもう。古典によって軽快さを感じたり、重厚さを感じたり、それぞれの書風を比べるとその違いがわかる。そして、その違いがどんな用筆の工夫から表現されたものなのかを知り、臨書してみると面白い。自分の気に入った古典を臨書するのもいいし、逆に自分にはない書の表現を吸収するために古典を臨書するのもいい。これからたくさんの古典と出会い、様々な表現や用筆の工夫を学ぶことで、表現のコツが君たちのポケットにたまっていく。それはきっと、創作にチャレンジするときの確かな礎になってくれるはずだ。



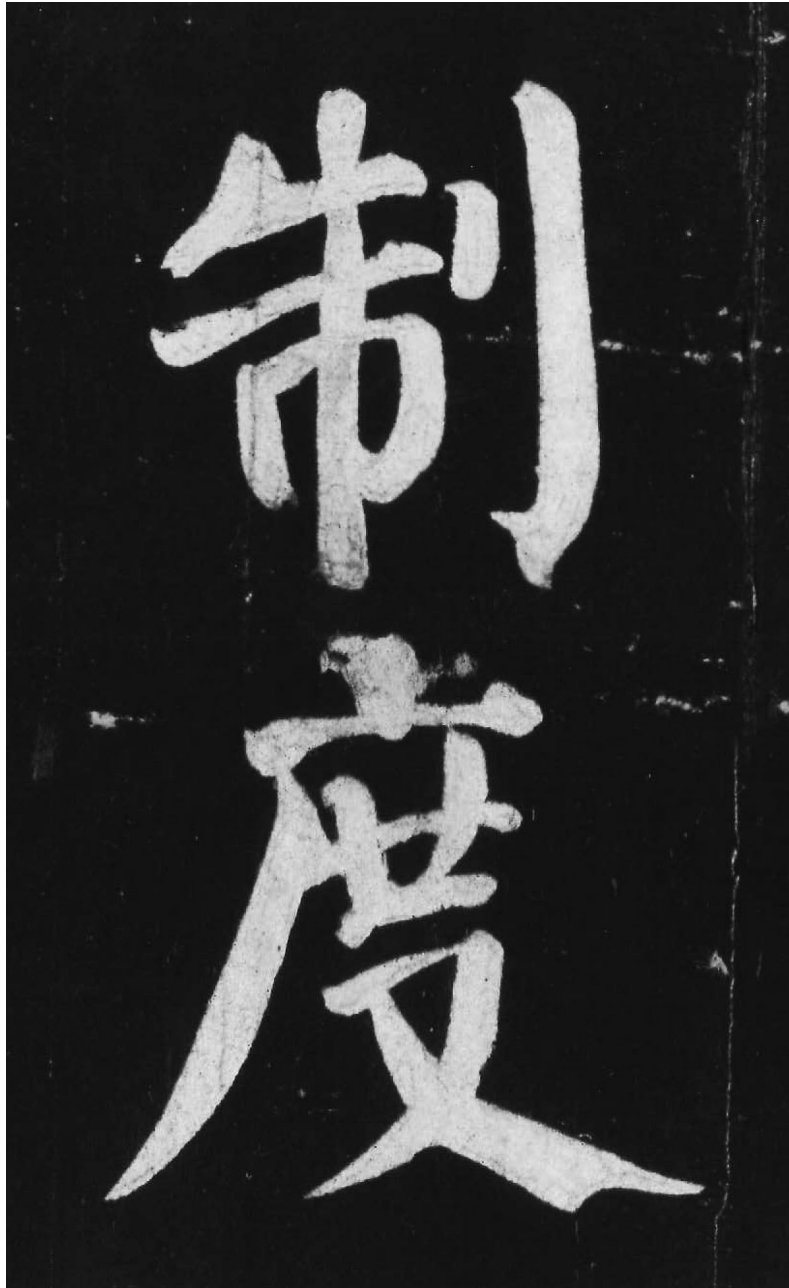
達人
青山浩之

雁塔聖教序



Handwriting practice lines consisting of ten horizontal dotted lines on a white background.

自書告身



Handwriting practice lines consisting of ten horizontal dotted lines.